

# タコはどうやってタコになるのか？

東京海洋大学 海洋生物資源学科  
増殖生態学研究室 准教授 團 重樹

前号の第33時限目に引き続き、東京海洋大学海洋生物資源学科の團准教授にご執筆いただきました。今回はタコの生態についてご紹介いただきます。

タコ類の特徴は？と聞かれると、ほとんどの人はニョロニョロした長い腕と強力な吸盤、丸い胴体（あたま）、そして岩肌にカモフラージュしたりスミを吐いたりする姿を思い浮かべるのではないのでしょうか。海底でのタコ類の生活は、これらの特徴的な身体構造と能力によって支えられているとも言えます。では、タコ類は生まれた時からすでにこのような特徴を持っているのでしょうか？

その答えは、タコの種類によって異なります。タコ類には、マダコのように2mmほどの小型の卵を数多く産むタイプ（小卵多産型）と、イイダコのように1cm近い大きな卵を少数産むタイプ（大卵少産型）が存在します。卵からふ化した直後のマダコは、胴体が大い代わりに腕が短く、各腕には吸盤が3～4個しか付いていません。そして、数週間にわたって水中を漂って生活したのちに海底での生活を始めます。一方、イイダコはふ化時にはすでに長い腕と多くの吸盤（各腕に30個程度）を持っており、海底で生活することが可能だと考えられています。つまり、成長に伴って能力を身に付けていくマダコに対し、すでに兼ね備えて生まれてくるのがイイダコであると言えます。しかし、マダコがどのように身体と能力を発達させるのか、また、ふ化したばかりのイイダコがどのような能力を持っているのか、具体的なことはほとんどわかっていません。

生物全般について言えることですが、未熟な稚仔期は、外敵に襲われて食べられたり、餌にありつけずに死亡したりする危険性が高い時期です。タコ類の資源を保護・維持しつつ今後も利用していくためには、タコ類の稚仔がどのような生息環境でどのように生活しながら成長・発達しているのか、すなわち「どうやってタコになるのか？」を理解する必要があります。現在、海洋建設（株）をはじめ多数の機関と連携して、タコ類稚仔の生態解明に取り組んでいます。



マダコの卵（長径約2mm）



ふ化直後のマダコ



約30日間飼育したマダコ



イイダコの卵（長径約10mm）



ふ化直後のイイダコ



約50日間飼育したイイダコ